

1 恵子さん、お孫さんの治療

六月初めの朝のことです。

リリリン… リリリン… リリリン…

「はい、松本です。…あつ、恵子さんおはよう。お義母さんここにいますよ、今変わりますね。」

「お義母さん、恵子さんから電話です。」

二人が居間で朝のテレビ小説を見終わつたとき、近隣の恵子さんからお義母さんに電話があり、取り次ぎました。

「おはよう。…そうなの？ イチジクはないのよ。あなたが使うの？」

「あつ、そうなの。お孫さんね、大変ね。家(うち)は以前からのガラス製なのよ。」

「ガラス製でいいのね。うん、わかつた。グリセリンと一緒に持つていくから待つていて。」

電話を切ると恵子さんからの電話内容を私に手短かに話しました。

「恵子さん、雅子ちゃんの子どもさんを三日間預かつているんだけど、今朝から腹痛を起こして腸捻転らしいのよ。イチジクがあればすぐに治るからと貸してもらおうと訊ねてきたんだけど、家はガラス製の浣腸器と言つたのね。でも彼女は『それでもいい』とのことなので、すぐ持つて行くと話したのよ。」

「大変ね。けど浣腸器を借りるといふのも驚きですね。」

「昔は浣腸器の貸し借りも時々はあつたのよ。彼女の家もガラス製の浣腸器を使つていたんだけど、今はイチジクを使つているんだつて。でもそれを切らしていたんで、家に電話を掛けてきたのよ。」

お義母さんは奥の部屋に行き、襖からビニール袋に入れた浣腸器とグリセリンの瓶を取り出して紙袋に入れ、軽トラックで坂道を降りて行きました。

二時間ほどして家屋一階のシャッターが開閉し、間もなくお義母さんが居間に戻つて来ました。

「お帰りなさい。お孫さんはどうだつた？」

「幼稚園の女の子だったんだけど、寝室の布団の中で『お腹が痛い』と泣いていて。私の渡した浣腸器とグリセリンを恵子さんが準備し、私は仰向けに寝た女の子の両足を上に持ち上げて、恵子さんが浣腸したの。その後、恵子さんはお孫さんを腕に抱き、肛門に脱脂綿を充てて3分程我慢させ、準備していたおまるに排便させたの。黒っぽい便が沢山出て驚いたわ。けど排泄したらたちまち元気になったのよ。そして恵子さんは『あなたのおかげ』とお礼を言ってくれたの。」

「よかったですね。」

「そうなの、よかったですわ。」

その後、恵子さんは浣腸器を洗剤で洗ってビニール袋に戻しました。それをグリセリンの瓶と一緒に紙袋に入れてから、お茶とお菓子をこ馳走になって帰って来たとのことでした。

2 腸捻転

「お義母さん。私、コーヒを飲もうと思うけど、一緒に飲みませんか？」

「そうね、飲もうかしら。」

私は立ち上がり、台所に行つてお湯を沸かしました。熱湯で濾したコーヒをカップ二杯に注いで居間の座卓の上に運び、二人で飲み始めました。

その時お義母さんが私に聞きました。

「あかねちゃん、腸捻転という言葉聞いたことある？」

「うーん、聞いたことあるような無いような…」

「そうよね、今はあまり聞かないわね。けど昔は時々あったのよ、急にお腹が痛くなって苦しむの。恵子さんの娘の雅子ちゃんも、小学校低学年の頃まではたびたび腸捻転があったそうなの。急にお腹が痛みだして…でも浣腸するとすぐに治るの。女の子の症状は『雅子ちゃんと同じ』と言っていたわ。」

「雅子さんも、子供の頃はよく浣腸をされていたの？」

「そうなの、よくされていたのよ。昔、私が何かの用事で恵子さん宅に行つたとき、居間で恵子さんが雅子ちゃんをうつ伏せにして浣腸していたことがあったわ。そばに差込み便器を準備していたの。雅子ちゃんが小学校低学年の頃、保健室で女の先生に浣腸されたことも恵子さんから聞いたわ。腸捻転だったの。そう、子どもに

とつて浣腸は当たり前のことだったけどね。」

「ふうん、そうだったんですね。」

そう軽く答えたのですが、子どもの頃は雅子さんも浣腸をされていたことに驚きました。

私が雅子さんを知ったのは、私たちの結婚式当日。

街の結婚式場で式と懇親会を終えた後、我が家に戻って二次の懇親会を開いたとき、雅子さんも家に来てくれていました。

彼女は既婚でしたが、背が高く、やせ型の美しい女性でした。

彼女も子どもの頃によく浣腸をされていたことを知ると、もしかしたら私と同じく『今もご主人と浣腸プレイを楽しんでいるのでは…』などと一人で推察してしまいました。

「ところでお義母さん。差込み便器って何ですか？」

「差し込み便器というのは携帯便器のことですね、家にもまだあるのよ。見たければ出して来るけど。」

「そうなんですか。けど、いいですから。」

「残念ね、見せてあげるのに…」

「お姉さんや靖文さんは腸捻転にはならなかったの？」

「腸ねん転としては覚えがないわね。便秘はあつたけど。雅子ちゃんは小さい頃は痩せて弱弱しい体つきでね、それも原因の一つかもしれないのよ。以前恵子さんに聞いた話だけど、彼女も小さい頃は痩せていて、腸捻転にもなつていたというのよ。今は見るからに丈夫な身体だけだね。」とお義母さんは笑っていました。

3 あかねの体調不順

お義母さんは以前田んぼだった所を畑にして、1500アール程テッポウユリを育てています。

出荷時期は初夏。その花は咲くと綺麗です。白が中心ですが、赤、黄、ピンクもあります。我が家もその花を町の花市場に出荷しています。

花は連作障害防止のため二〜三年に一度は畑を変えて、通算十年ほど作つていました。

私も出荷時は、午後の荷作りと、翌朝のお義母さんに付いて町の花市場に荷を運ぶお手伝いをしています。

お義母さんからは、一日8千円の報酬を頂いています。

お義母さんの花市場での売上は、年間60万円を超えるとのことでした。

私も夫の給与とは別の報酬が得られることが嬉しく、今年もお義母さんと一緒に、地下足袋にブラウスとモンペ、そして麦わら帽子をかぶりその作業を手伝いました。

七月末となり、町の花市場に今年最後の出荷をしました。その後は普段は帰ってから家で済ませる昼食を、少し早い時間に街のレストランで一緒にとりました。

食後のコーヒーを二人で飲んでいるときに、お義母さんは私に小さな声で聞きました。

「あかねちゃん、赤ちゃんの兆しはどう？」

「まだです、残念。」

「頑張つてね。あかねちゃんもそうだけど、靖文も頑張らないといけないわ。」

「はい、そうします…」

結婚してから一年半が過ぎました。

お義母さんには内緒でしたが、靖文さんからの要望もあつて、今までは避妊をして二人の時間を楽しんできました。

ただもうそろそろ出産を考える時期かなとは思っていました。

「お義母さん。それはそうと私、一週間近く出ていません。」

「エッ、そうなの？一週間はきついわね。」

「以前お義母さんといっしょに靖文さんに浣腸してもらってから三ヶ月。また少し苦しくなってきました。」

「そうなの。なら帰ったら奥の部屋で浣腸してあげる、いいでしょう？」

最近のセックスの時は『浣腸プレイ』は出てきていませんでした。

晩に夫には、お義母さんに浣腸してもらった事を報告するとして、だったら今浣腸してもらおうと思いい立ち「お願いしますお義母さん。」と頼みました。

その後レストランを出て、お義母さんが運転する軽トラックに乗って山道を登りました。

家に着くと二階建の建物の前で、私が車に載せてある無線機でシャッターを開いて車を入れた後、二人は母

屋へ行きました。

その時ブラウスが作業で少し汚れていたので、「お義母さん。私、二階に行つて着替えてきますから。」という、「いいのよそのままです。」とお義母さんは言つて、少し汚れた胸のあたりをポンポンと手で叩いて奥の部屋に私を連れて行きました。

奥の部屋に入ると、「準備するから待つていてね。」と言われました。

私は部屋の座卓の前で正座をして待ちました。

お義母さんは奥の襖を開いて、たたんである敷布団を出して畳に敷き、その上にシートも敷きました。

そして隣の襖の奥にある大きな引き出しの二段目から、ビニールに入った浣腸器とグリセリンの瓶、化粧品クリーム、それと200ccの計量カップを取り出して座卓の上に置きました。

計量カップはお義母さんが最近買ったようでした。

「あかねちゃん、台所に行つてこの計量カップに水を50cc入れて来て。」

「はい。」

私は立ち上がり、計量カップを持って台所に行き、水を50cc入れて部屋に戻りました。

お義母さんはその水にグリセリン50ccを入れ、100ccの浣腸薬になりました。

その量を私の浣腸の量としているようです。

そしてお義母さんは手に握つた浣腸器の先端を液に浸け、ピストンを上下に動かして混ぜました。

私はまたあの浣腸薬が私の直腸内で暴れだすのだと思ひながらお義母さんの作業を見ていました。

お義母さんは液を混ぜた後、浣腸器を空にして座卓に置くと、突然私に聞くのです。

「あかねちゃん、前に話した差込み便器の事だけ。今日はそれで便の状態を見てみたいのだけど、どうかしらねえ?」

「エッ!もしかして、恵子さんのお孫さんみたいに私の便も見るの?」

「後学のために見ておきたいのよ。」

「差込み便器なんて恥ずかしいなあ…」

「見ておきたいの。」

「なんか恥ずかしい…見せないとだめですか?」

「昔から便の状況で身体の状態を判断したのよ。少しだけ我慢してくれない?」

「…分かりました。」

私が了解したことでお義母さんは立ち上がり、引き出しの三段目から、私が今まで存在を知らなかった差込み便器を取り出して来ました。

「これが昔から使ってきたホーロー製の差込み便器なの。あかねちゃんの実家にはなかった?」

「ええ、なかったです。」

私の実家には便器はありませんでしたが、独身の頃にネットのSM画像でこれと同じ三角型で白色の便器を見たことはありました。

「これは寝て、お尻の下に差し込んで用便するものなのよ。」

「家族の方も使ったの?」

「そうよ、昔の事だけど。おじいさんもおばあさんも、夫も。子どもたちも小さい頃には使っていたのよ。」

「古い物なんですね。」

「そうなの。でもどうしても捨てられなくてね…今でも持っているのよ。」

「お義母さんも使ったの?」

「幸い私は健康で今まで便器を使うことは無かったわ。けど、一人で試したことはあるのよ。」

「使ってみて上手く出来ましたか?」

「上手く出来たわ。その意味でもあかねちゃんにも一度試してもらいたいのよ。」

「分かりました…」

「あかねちゃん。ここで着衣のままでもいいから布団に寝て、差込み便器の感触を確かめてみて。」

「けど、やっぱり恥ずかしいなあ。」

「いいの。あかねちゃんは私の大切な子どもなんだから。」

私はモンペを履いたままシーツを敷いた布団に仰向けに足を広げて寝て、お義母さんが差し込みました。私もお腰を左右に調整して排便の体勢を取りました。

「ちようどの位置になったわ。」

「けど、おしっこが外に漏れるかもしれない。」

「大丈夫よ。外には出ないと思うけど、陰部にティッシュペーパーを置いておきましょうね。男性なら手で性器を下に向ける必要があるけど。」

「なんか恥ずかしいなあ…」

そう言いながらも少し笑ってしまいました。

再度起き上がると、今度は履いているモンペとパンティを全て脱ぎました。しゃがんでそれらを布団の横にたたみ、布団の上で四つん這いで浣腸を受ける態勢をとりました。

「それじゃ始めます。」

「はい… お願いします。」

お義母さんは私の後ろにまわり、布団の上に正座で上半身を起こし、左手で臀部を押さえました。

右手親指と人差し指で肛門を開き、詳しく検査した後、いつものようにローションを塗った右人差し指を直腸内部に入れてしばらくの間、直腸内をマッサージしました。

私は性感を感じる声が聞かれないようにしてはいましたが、もうお義母さんとの間では声を押さえる必要も無いのでも思えました。

その後お義母さんは直腸から指を抜き、ティッシュペーパーで指をぬぐって傍の塵籠に捨てました。

そして立ち上がると座卓へ行き、液を一杯に満たした浣腸器を右手で上に向け、左手に残りの液の入った計量カップを持って再び肛門側にまわりました。

「浣腸するからね。」

私は無言で首を縦に振りました。

嘴管が私の肛門から直腸内に入りましたが、私は動かずじつとしていました。

一回目に続いて、横に置いた計量カップから吸い上げた二回目直腸内に注入されました。

お義母さんからされるグリセリンの混ぜた浣腸薬は、注入すると間もなくおなかに痛みが襲ってきます。

二階で夫と二人で行う浣腸の場合は、夫は挿入した後に時々ですが、私の性器や肛門にバイブを入れることがありません。

ブーンという音を響かせて、苦しさやバイブの心地良さを同時に与えられることがあるのです。

でもお義母さんには、これは胸の中に隠しておきます。

なお義母さんに陰部を見られて、恥ずかしいものが濡れ出しているのかどうかは気にならなくなっていました。

暫くすると、お腹の音がゴロゴロと出始めて、排泄を促す蠕動が周期的に襲ってきます。

それでもそのまま四つん這いの格好で3分は耐えたと思います。

「お義母さん、もう便器を使っていますか？」

「ええ、そうして」

私は四つん這いの姿勢から上半身を起こし、今度は仰向けになって足を開き、お義母さんが差込み便器を臀部の下に入れてくれました。

「おしっこが外に漏れるといけないからティッシュペーパーを当てておくわね。」

「そうしてください…」

お義母さんが置いた三枚のティッシュペーパーを私は軽く上から押さえました。

「ブリブリブリブリブリ…」恥ずかしい破裂音と臭いを撒き散らして沢山の便を排泄しました。

お義母さんは正座したまま排便状況をじつと見えています。

排便の量はもりもりと増えて行つたと思います。

差込み便器充てていた5分程、ティッシュペーパーこそ濡らしていませんでしたが、おしっこも出しました。

「ふ〜」

「十分出た？」

「はい、十分出ました。」

体を起こして中腰になり、体に付いた少しのおしっこを拭きました。同時に布団の横に準備してあったティッシュペーパーで何枚も肛門を拭き、便器の端に落としてからお義母さんと二人で便器の中を覗きました。やはり便は大きく盛り上がり、普段の三倍を超えるほどの量でした。

ただ色は黄色く正常で、通常の便秘と判断しました。

そしてその時に思ったことです… 私は靖文さんとの結婚生活は全て成功と思います。

ただお義母さんやこの前のお姉さんのことも含め、結婚当初には考えられなかったこともありましたが、それでも、これからも私は、この二人には不快感を感じさせることのない嫁でいようと思いました。

4 酢浣腸

私は立ち上がり、畳の場所でパンティとモンペを履こうとしたとき、お義母さんから突然の要求がありました。

「待つて、服を着ないでいて。これは便所に流してくるから」

私は分けが分からないまま下腹部を裸にしたまま畳に正座しました。

お義母さんはお便所に行つて便を流し、差込み便器を洗つて部屋に戻つてきました。

「この際もう一つだけ教えておきたいの。」

「なんですか？」

「あかねちゃん。酢浣腸つて知らないでしょう？」

「スカンチヨウつて？ 私、知りません」

「そうよね。田舎では昔からよく知られたことなので、これも教えておきたいのよ。」

「お酢で浣腸でもするの？」

「そうなの、子どもの蟯虫を退治する方法だね。この田舎では、いつ頃始まったかは分からないけど、子どものお尻が痒くてたまらないときには、お酢で浣腸して治療していたのよ。」

「私、聞いたことがありません。」

「子供が小さいときに下着の上や肛門に直接手を入れて掻いたりすることがあるのね。そのときは酢浣腸が良いとおばあちゃんに教えられたの。おばあちゃんは子どもが小さいときには肛門付近を掻いていると、酢30cc程を浣腸器で吸い上げて浣腸し、この差込み便器に排泄させていたそうなの。それからは私も子どもにしていたのよ。これも我が家の伝統として覚えておいてもらいたいの。あかねちゃんもお母さんになったらしてあげてね。」

「お酢を腸内に入れたら痛くて泣くことはなかったの？」

「泣くことはなかったわね、グリセリンとは違うから。その方が蟯虫の痒さより、まだましなのよ。あかねちゃんも小さいとき肛門が痒いと思つたことがあつたはずよ、記憶はない？」

「うん… あつたかなあ、なかつたような…」

「必ずあつたと思うよ。私も定期的にだけ、夜寝る前に子供を順番に膝にうつ伏せに寝かせて、髪留めのピンの後ろの丸い部分で、蟯虫がいるかどうか肛門を検査したのよ。」

「そうですか。話が変わるけど、さっきの浣腸器の貸し借りのこともそうだけど、このあたりの方は恥ずかしさよりも健康を守る器官として肛門を考えていたようですね。」

「そうね。恵子さんもそうだと思うけど、体のために必要ということで浣腸しても全然驚かないし。田舎の人はそんなものなのよ。」

「よくわかりました。私もこの習慣にだんだん慣れていきますから。」

「話は戻るけど蟻虫の話。とても小さくて白い虫でね、それを見つけたらお酢で浣腸したのよ。その時は痒さが先にたつて浣腸は嫌がらなかったの。」

「そうなんですね。」

私は下腹部が裸になったままその話を聞いていました。その時、お義母さんが言った意味が分かったのです。

「あなたは私の子どもだから一度酢浣腸も経験して頂戴。」

「話を聞くだけではダメなんですね…」

「ダメ。私の膝にうつ伏せに載りなさい。」

「わかりました。それじゃ検査して下さい。」

お義母さんは再び洗った差込み便器を側に置きました。

下半身裸の私はお義母さんの膝にうつ伏せで寝て、お義母さんは私の肛門を、持って来た髪留めの先の丸い部分で、肛門に蟻虫がいなかゆつくり検査をしました。

もちろん先の浣腸もあり蟻虫はいません。でも黙ってお義母さんの膝を降りて再び四つん這いで待ちました。

お義母さんは台所で計量カップに入れてきたお酢30cc程を私の直腸内に注腸しました。

3分ほどして痛みが少ない中、今度は中腰で差込み便器にしゃがみ、量は出ませんでしたでしたが排便しました。

その後ティッシュペーパーで肛門・陰部を拭き、便器に落としてからパンティとモンペを着用しました。

私は台所で浣腸器と計量カップを洗浄し、お義母さんはお便所に行つて便器の洗浄を済ませて、奥の部屋に戻りました。

「分かった？これが酢浣腸なの。」

「分かりました。」

「さあ、あかねちゃんも酢浣腸も経験したし、本当に良い子だったわ。私うれしい。」

「私も良かったです。」

それからお義母さんが妙に神妙な顔付きで私に話しかけたのです。

「これでわが家の浣腸のことは全て話したと思うの。それとね…私、年を取ってあなたに下の面倒を見てもらうことがあっても恥ずかしさが無くなったわ。安心してお願い出来る気がするのよ。」

「お義母さん安心して下さい。先になつて下の世話が必要なときは勿論ですが、これからも必要なときは私が浣腸してあげますね。」

「そうね、お願いね。けど私が歳をとつて動きが鈍いからと言つてお仕置きのための浣腸はやめてね。」

「そうですね…そんなことが起こるかも知れませんが。」

「まあ、怖いわね。」

「ウンです。安心して下さい」

そんな会話で笑い合いました。

「ところでお義母さん。今、便通は正常ですか？」

「そうね、私もしばらく出てないのよ。私も浣腸しておいてもらおうかしら。」

結局お義母さんはその場でモンペとパンティを脱いで四つん這いで布団に載り、ました。

私は炊事場から計量カップに水100ccを入れ、グリセリン100ccも加え200ccの浣腸薬をこしらえました。

そして3分ほど直腸マッサージをし、200cc(4回分)を注腸しました。

その後お義母さんも布団の上で仰向けになって、差込み便器で排便を済ませました。

二人でお義母さんの便を检查した後、お義母さんは排泄物を再びお便所に捨てに行き、私は浣腸器などを台所で洗浄し、それをお義母さんに渡してお義母さんが襖を閉めました。

「ところで今日のごことは靖文には話すの？」

あまり今日のごことは詳しく言われたくない素振りが見えたので、簡易便器を見せてもらったことだけを軽く話そうと思いと答えました。

「そうね、これは家庭の主婦の教育だものね」

「は？」

【お義母さん、ごめんなさい。この文章は夫と私の極秘文書です。お義母さんのことも詳しく書きますが不

利になることではありませんのでどうぞお許しください。】

「さあ、これで、浣腸のことは全て伝えたわ。」

「はい、よく分かりました。」

「うん、良いお嫁さんが来てくれたと思うわ。」

「そんなことはありませんよ、私こそ感謝します。ありがとうございます。」

居間に来た二人はその後、私は二階に上がり、お義母さんは再び奥の部屋に戻って行きました。

5 昔見た文章

二階に戻り衣服を着替えて椅子に座りました。

漠然と外の景色を眺めていたとき、私が会社員の頃に女性の性に関する文章をネットで見たことを思い出しました。

それは性に関するもので、女性の持つ「クリトリス・小陰唇・肛門」の三つは、全て陰部神経が支配しているけれど支配の割合はバラバラで、平均的に神経が通っているのではなく、神経がクリトリスに太く発達している女性もいれば、肛門に太く発達している女性も、小陰唇に太く発達している人もいるとのこと。

また男性も同様に「肛門・ペニス・陰囊」の三つが陰部神経に支配されている。

そして、ペニスに神経が太く発達した人、肛門又は陰囊に神経が太く発達している人がいる。

男女共それぞれに気持ち良い場所、感じる場所には違いがあり、他の人と異なる性癖となる可能性があることを示唆することが書かれていたのです。

それに加えて、生まれ育った文化や育成環境、性的な経験によってその人の性の考え方、表現の仕方、性癖が変わってくるのではないかも考えられるとのことでした。

これを思い出したとき、私の性癖はどうだろうと、ふと考えてみました。

私は陰部神経が肛門に太く発達しているから浣腸を愛する女性になったのかしら？

ただ高校二年生の時、倉庫にあった古い書類の中から偶然発見した、実のお義母さんの健康手帳には、私たち姉妹がたびたび便秘を起こして浣腸をしたことが書かれていました。

ところで、最近、県外に出張したとき、自分の運転で行ったのですが、ふと、こんな衝動にかられました。それは、母が一泊家を空けるとき、我が家の蔵の二階にポリ容器に入れた水と空のバケツを準備して、そこで古い長椅子に布団を敷き、あかねをうつ伏せにして浣腸するのはどうだろうと。

そのときには全裸で、両手両足を長椅子の足に固定したい。

前回買ったまま、まだ使っていない3リットルのイルリガリートを蔵の二階に運んで上から吊るし、あかねに一リットルの水を、ゆつくりゆつくり時間を掛けて注腸したいと思っています。

自分は椅子に腰かけて、あかねを見ているから、あかねが苦しくて止めてといえばすぐに止めるからね。

それが終われば今度は自分があかねと同じ格好で2リットルを受けます。2リットルは私も自信が無いから途中でストップするかもしれないけど見ていて。

これに挑戦するかしないかを考えてみて。

9月19日午後3時過ぎ報告

あかね、1リットルを10分ほどかけて達成しました。

私、2リットルを15分ほどで達成しました。

<https://www.spaceinga.com>

SPACE 銀河

靖文

あかね

靖文